

シンポジウム
「日本語教育インターンシップ・
国際日本語教育実習
- 海外における日本語教育とその問題点 - 」

日程：2008年7月12日（土）

場所：国土館大学梅ヶ丘校舎 34B304 教室

開会の挨拶

若林克彦(国土館大学 学長、アジア・日本研究センター長)：

21世紀アジア学部は、留学生が日本を学ぶために、また日本人がアジアを学ぶために、非常に多様なプログラムが用意されています。さらにグローバルアジア研究科は、アジアに関する研究を恒常化し、アジアのほかの大学と提携を交わして交流を深めているという認識をしています。そのなかでも日本語教員養成課程は、学部の留学生に対して実際に日本語教育の実習を行い、そして海外日本語教育インターンシップ制度が設けられています。またグローバルアジア研究科においても国際日本語教育実習において海外で実習を行うなど、グローバルな人材を育成するという大きな構想の一端を担っているわけです。学生が日本語教員として海外の学生に教えるという制度は、ほかの大学にはない、わが校独自のものです。この体験で培った能力をもって、卒業後さまざまなところで日本語教育の専門家として活躍する学生が生まれていく。それを踏まえて、日本語教員育成分野は着実に成果を出しつつあると言えるのではないのでしょうか。また海外で実習を行ってきた学生は、みな顔つきが変わってきています。教えることの難しさ、違う文化の空気に触れるなど、日本では想像もできない異文化体験をしてきたのではないのでしょうか。本日は、海外日本語教育に携わってきた教員のみならず、インターン生の声を聞くことができます。今後も日本語教員として海外で活躍できるグローバルな人材育成を進展させ、充実させていってほしいと思っています。

「グローバル化と海外日本語教育」

梶原景昭(国土館大学大学院グローバルアジア研究科 委員長)：

今日はまず、このプログラムをここまで成長させて立派な成果を挙げられた中島先生、鶴田先生、邢先生、栗原先生、そして学生の谷内さん、町田さん、ラムさん、それに続く学生のみなさんの努力に深い敬意を払いたいと思います。また若林学長や三浦信行アジア・日本研究センター学術顧問、小牧学部長の暖かいご支援のたまものでもあります。

学生さんは大体、今日は鶴川からいらして、ここ世田谷・梅ヶ丘校舎は初めてだという方が多いと思います。ここは都心型キャンパス、鶴川は郊外型キャンパス。ロケーションから見ればそのとおりですが、21世紀の今日はそれだけではくくれません。しかしながら鶴川校舎はたとえばナリーザ・ドイショノワ先生がいらっしゃるビシュケクとテレビ会議システムでつながっているのです。また、この場にナリーザ先生がいらっしゃるように、人の交流もある。そうすると郊外と都心と言う意味は、この情報化・グローバル化の社会の中では今までの意味合いとまったく違います。たとえばビシュケクは中央アジアにあります。そこからロンドンや北京、モスクワまでも全部、数時間でいけるのです。地勢学的には非常に重要な位置にある。そこと鶴川が結びついているのです、日本語で。グローバル化はイコール英語化のように思われていますが、そうじゃない。グローバル化は画一化だけでなく拡散化し、小さなところにも光が当たることが認識されなければならない。21世紀アジア学部もしかりです。小さいものと大きいもの、遠いところと近いところが違った形であらわになる。その背景には世界中で300万人学習者がいる日本語があるのです。グローバル化の進行においてどういう点

が重要になりうるのかと、今日、この催し物が物語っているのではないかと思います。

「21世紀アジア学部学生の海外日本語教育インターンシップへの期待」

小牧輝夫(国土館大学 21世紀アジア学部 学部長) :

この日本語教員プログラムというのは、これは当大学の特徴でしょうか、海外でのインターンシップも留学生のみなさんの協力を得て行う日本語教育実習もあり、めぐまれた環境だと言えるのではないかと思います。今回は海外に行った方のお話ですが、苦労された中には日本文化をつたえるということや相手の言葉や文化を知ることでもあると思います。また教育を授ける側としての工夫と言いますか、ヒントを教えていただけたと思います。学部から大学院に行って、専門的に勉強を続けられる方もいらっしゃるでしょうし、学部を卒業して現実には、なかなか難しいですね。日本語を勉強している人に教えられるというよるこびもあります。現実的な面では難しいところもあります。しかし必ずしも全員が日本語教員のプロになるわけじゃない。一般の企業に就職する人もたくさんいます。そのなかでも日本語教育の経験は大いに評価されているとも聞いております。したがって、今日参加されている皆さんにも得るところはたくさんあるのではないかと思います。インターンシップに行くには、その国の日本語に対するニーズ、それは学生も企業も社会での評価もそうですが、それらに寄るところもありますが、私たちとしましてはさらにインターンシップの機会を増やしていきたいと考えています。より日本との関係が密になり、日本語教員を必要としている、そして実際にインターンシップを受け入れてくれる場所ですね。皆さんにはいろいろ可能性があると考えて、安心して勉強を続けてもらいたいと思います。

では、今日の発表よろしくお願いいいたします。

「ロシアにおける日本語教育とその問題点 - ノボシビルスク市を例に - 」

栗原 通世(国土館大学 21世紀アジア学部 講師) :

2006年の3月にロシアのノボシビルスク市国立大学に参りましたが、その際の、とくに私が現地で感じたこと、ロシア人教員の方がおっしゃっていたこと、また今年5月まで継続して勤務していた日本人教員の方からの体験もあわせてお話しさせていただければと思います。

ノボシビルスクというのは、ロシアの中央部にあり、札幌市と姉妹都市提携を結んでおります。市民の日本への関心も高く、日本の中古車やスシのデリバリーが盛んでもあります。日本語教育は、大学やシュコーラなどの機関で行われていますが、ロシア人の先生方が中心となっています。二ヶ月に一度ほど日本語教師会というものを開いておまして、意見交換をしているとのことでした。

一例として、ノボシビルスク国立大学での日本語教育のケースを紹介します。二つコースがあります。人文学部東洋学学科のロシア人教員は全員長期の日本留学経験があります。ここでは文法読解はロシア人の先生が担当していて、会話などは日本人教員が担当する、という役割分担がなされていました。この学科の学生はみな、日本の政治や文化に興味があったですね。また日本語の能力も高く、会話の流れの展開を考えて話すことができていました。外国語学部英語学科では、ロシア人の先生方は優秀な成績を買われ、学部卒業後そのまま日本語教員として採用され、また英語の教員も兼ねていらっしゃいました。こちらは担任制で、読解も文法も会話もお一人の先生がずっと見ているようでした。

コース運営上の課題として、学習者に関するものとしては、日本語を使う機会が限られるため、学習動機や日本への関心の維持が難しいという課題があります。次に教員側の課題ですが、先生方は学習者として日本語を学んだ経験があっても専門教育として教授法を学んだわけではなく、学習者に合わせた日本語教育のカリキュラムを作っていくのが難しいというものがあります。この問題の背景には、学部・教育機関を超えての教員同士の情報交換が十分に行えていないという問題があるように感じました。

このような課題を踏まえて、日本語ネイティブの教員に期待されていることを述べますと、学習者の日本語運用能力の向上に貢献すると言うことで、とくに会話と作文の指導があがっていました。それから学習者の日本に関係する知的好奇心を満たす、ということです。現在の日本事情について、さまざまに知っておく必要があります。三点目はロシア人の教員の方々と協力することです。教授法や教材に関して質問をされるのですが、そのときに応えられるよう幅広い知識を身につけておくことです。4点目は、派遣先の機関だけでなく地域の日本語教育に貢献することです。最後になりますが、現地の学生や先生方と上手にコミュニケーションがとれること、また現地の環境や食、文化に適應できることが肝要と言えます。

以上です。ありがとうございました。

「海外における日本語教育の現状と問題点 - 華東師範大学、上海師範大学を例に - 」

中島 悦子（国士舘大学 21 世紀アジア学部 教授）:

海外で日本語を教えるということは、日本と同じではありません。教材も不足しています。学生のモチベーションを高めるにはどうしたらいいのか。さまざまな指導方法の工夫が求められています。今日は上海における日本語教育の現状、そこから見える各国共通の問題点をお話したいと思います。

第一は教授法の問題点です。直接法か文法訳読法かということとして、日本国内では直接法がほとんどです。しかし上海師範大学では直接法はほとんどとられず、日本語と中国語を混えた、一種の文法訳読法といった方法がとられておりました。何故この方法をとっているのかと質問しましたら、ゼロから入ってくる学生さんには日本語で説明しても通じない、というのですね。具体的には、文型の意味と形の作り方は中国語で導入し、翻訳させているのだそうです。文型練習と応用練習だけは日本語でするそうです。どちらのほうがあるのかと聞いたところ、両国語を混えた方法のほうが、期末試験でよい点数が取れる、とおっしゃったのです。実際海外において現地の先生が純粹に日本語だけで教えるのは不可能に近いのではないかと思いました。では実際の教室活動ではどの部分に学習者の母語を混えたら効果が上がるのか。現地に即した教授法の開発が求められているのではないかと思いました。

第二の問題点は、文法の問題点として、学校文法か日本語教育の文法かという問題です。みなさんは 21 世紀アジア学部では日本語教育の文法を習っていますね。ところが、海外に目を向けますと、多くの日本語教育の現場では学校文法で教えられていて日本語教育の文法はとられていないそうなのです。その理由は、中・上級レベルになると国語辞書を使うのですが、これには学校文法で載っているのですね。この使用する文法用語の違いをどうするか、ということは非常に大きな問題になっています。

三つめは習得目標として、日本では四技能、聞く話す読む書く、ということに加え、中国では翻訳をプラスした五技能になります。日本語と中国語の表現の違いはどうするのか、ということが疑問に思いました。たとえば「子どもに泣かれる」といって迷惑をこうむるニュアンスの日本語がありますが、中国語には同じ意味のものがないのです。こういった微妙な点が翻訳や通訳の際に問題になります。日中対照研究がその役に立つのではと思います。

以上は上海で視察してきたことをまとめたのですが、これはここだけに限ったことでなく、海外の日本語教育の現場ではしばしば起こる問題だと思います。海外に派遣される日本語教員には、受け入れ側の要望に応えられるかどうか、先方の現場に即した教授法、教材や辞書が提供できるかどうか。これは送り出す側として考えていかなければならない問題だと思いました。

「中国へのインターンシップ・特別研究学生の派遣経緯」

邢 志強（国士舘大学 21 世紀アジア学部 教授）:

今日は三つのこととお話したいと思っています。

インターンシップは、私が知っているところとお話させていただいて実施しているのですが、ここでは非常に低料金で、行った学生さんにも満足していただいています。普通ですと、短い期間で高額なのですが、学生さんに負担に思っほしくないのです。また、特別研究は、たとえば一年間留学してもらっていくつか単位を認める、ということをしています。このシステムは学生さんはあまり知らなくて、相談を受けることも少ないのです。

アジア学部を国士館の目玉にする、ということをしていただければと思うのです。たとえばアジア学部ではツープラスツーで学位が取れるのですが、このことはあまり知られていない。五年一貫性、これも知られていない。これを打ち出していければいいのにと考えています。これからの大学は国際化についていけない大学はつぶれるのですから、こういうシステムを活用しなければならないと思います。

二番目は世界を知って自分を知る、ということです。人間は外に出ているいろいろ見て、視野を広くして成長していかなければならないと思うのです。外に行くと、考え方が変わります。行かないとわからない。帰ってきた学生さんからも、よかったという手紙をもらうことがあります。

三番目は人生の転機ですね。中国語との出会い。中国人との出会い。人生が 180 度変わったと言っていたこともあります。中国なんか興味もなかったのに、就職して、親に反対されても結婚までしたいと考えるようになる学生もいるのです。

取り留めのない話ですが、時間が来ましたので。